

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 6 日現在

機関番号：15501

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20730477

研究課題名 (和文) 単純接触効果の長期的潜在学習に基づくモデル化

研究課題名 (英文) Modeling of the mere exposure effect based on long-term learning

研究代表者

松田 憲 (MATSUDA KEN)

山口大学・大学院理工学研究科・講師

研究者番号：10422916

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・実験心理学

キーワード：実験系心理学, 単純接触効果, 概念形成, 長期的刺激接触

1. 研究計画の概要

(1) 刺激として, Barsalou et al. (1999) の刺激図に準拠して作成した熱帯魚の絵を用いた。刺激はそれぞれ 10 次元構造であり, Dimension7～10 は同種内の全ての事例で同一であった。事前典型性の設定は, 高典型群が D3～D10 を共有, 中典型が D5～D10, 低典型には D7～D10 を共有させることで行った。共有していない次元では, 各絵に独自の値を持たせた。参加者内要因として, 刺激典型性 (高, 中, 低) と呈示回数 (減少, 一定, 増加) を設定した。呈示インターバルとして 2 週間, 1 週間, 5 分を設定した。呈示回数の減少条件では, 呈示インターバルの 2 週間から 5 分に向けて, 5 回→3 回→1 回, 一定条件は 3 回→3 回→3 回, 増加条件では 1 回→3 回→5 回であり, 総呈示回数はすべて 9 回であった。刺激学習後に, 参加者には刺激を 1 枚ずつ呈示し, 刺激に対する感性評価 (9 件法) と再認判断 (2 件法) を求めた。

(2) 人工文法学習課題を用いて潜在学習を行い, 学習フェーズ内で文字列の呈示回数を操作した。この学習フェーズ内の呈示回数の操作が単純接触効果にどのような影響を及ぼすか検討を行った。昨年度に行った実験では, 学習毎で文字列の呈示回数を操作しながら長期的な潜在学習を行い, 単純接触効果に及ぼす影響を検討した。この先行実験では, 呈示回数の操作による好意度への影響はみられなかったが, これは文字列の過度の呈示で文法自体への接触が増加し, 天井効果が生じた可能性が考えられた。また短期学習においても呈示回数の効果がみられなかったため, 短期学習を隔週で行う長期学習でも, その効果がみられなかった可能性があった。そこで本年度に行った実験では, 各文字列の呈

示回数ではなく, 文法自体の出現回数の操作に変更して, 短期学習における呈示回数の効果について検討した。

2. 研究の進捗状況

(1) 全体的に, 事前典型性の高い熱帯魚の評価が高く, 典型性の低い熱帯魚の評価が低い傾向にあった。高典型刺激は既知感からくる安心感によって肯定的感性評価が生じる, という先行研究 (Matsuda & Kusumi, 2002) と同様の結果が得られたと言える。よって, 単純接触効果に概念のプロトタイプ形成の介在が示唆される。呈示回数については, 刺激の典型性ごとに異なる振る舞いを見せた。典型性低条件において, 刺激と形成されたプロトタイプとの類似性が低いために, 呈示回数減少, 一定条件における典型性・親近性評定値が低く, 肯定的感性に結びつきにくかったといえる。一方で, 呈示回数増加条件では, 直前の反復接触によるエピソード記憶の形成が刺激への典型性・親近性を上昇させたと考えられる。低典型刺激はプロトタイプとの類似性が低いにも関わらず典型性が高く評価された点については範例モデルのほうが適合性が高い。

(2) 文法との接触回数が増加すると, その文法の文字列は規則性があると判断されることが示唆された。一方, 好意度評定では接触回数, 文法性の効果は見られなかった。以上の結果より, 規則性確信度評定では, 接触回数の多い文法の文字列は文法, 非文法に関わらず, 規則性があると判断される傾向にあった。このことから, 学習された人工文法の構造ではなく, 学習フェーズで呈示された文字列との類似性や部分的な共通性の有無によって, 規則性確信度評定が行われていたと考えられる。好意度評定では, 天

井効果が起こらないよう呈示する文字列の量を減らしたにも関わらず、接触回数の効果が見られなかった。これは、接触回数の効果以外に、他の要因が好意度評定に影響していたと考えられる。また、学習フェーズとテストフェーズの間は5分と短かったため、規則性確信度、好意度評定ともに学習時のエピソード記憶が影響した可能性も示唆される。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)刺激として熱帯魚の描画と、人工文法を用いた実験を行い、一定の成果を得ることができた。

4. 今後の研究の推進方策

今後の方策として、熱帯魚描画と人工文法を刺激として用いた実験から得られた成果を広告効果へと応用させるという当初の予定を変更し、これまで行った実験によって生じた検討課題の解決を目指す。具体的には、以下に示すとおりである。

(1) 熱帯魚の描画を刺激として用いた実験では、長期的学習フェーズを設定したものの、評定直前にも学習フェーズを設定したために、プロトタイプと範例のそれぞれに基づいた肯定的感性評価が混同してしまっている可能性がある。そこで、今後はこれらを分離する学習スケジュールを設定し、長期的学習が単純接触効果に及ぼす影響を検討する。

(2) 人工文法を用いた実験でも同様に、長期的学習フェーズを設定するとともに、学習-評価間のインターバルを操作して、エピソード記憶が減衰した後についても短期学習条件と同様の結果となるか、検討を行う。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①Kusumi, T., Matsuda, K., & Sugimori, E. The effects of aging on nostalgia in consumers' advertisement processing. *Japanese Psychological Research*, **52(3)**, 150-162. 2010. 査読あり
- ②Sugimori, E., Matsuda, K., & Kusumi, T. The contradictory effects of nostalgic advertisements on nostalgia for products and on remembering advertisements. *Japanese Psychological Research*, **53(1)**, 42-52. 2010. 査読あり

[学会発表] (計9件)

- ①Ishikawa, S. • The examination of the mere exposure in long-term implicit

learning on artificial grammar • 9th tsukuba international conference on memory • 2011年3月7日 • 学習院大学

- ②Matsuda, K. • The effects of eye tracking movement on evaluation of the object motion • 9th tsukuba international conference on memory • 2011年3月7日 • 学習院大学

- ③石川 晋 • 長期的潜在学習における接触頻度の変化が単純接触効果に与える影響 • 日本認知心理学会第8回大会 • 2010年5月29日 • 西南学院大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他]

なし